

わが母校誕生のころ

― 本学の神話時代 ―



中村和成

学生募集

私が兵庫県立医学専門学校というものを知ったのは昭和十九年一月のある日の朝日新聞紙上でありました。当時は戦争も次第に敗戦の色が濃くなり、中学を卒業して上級学校に入らずに所謂浪人とやらでボヤボヤしていると言ぐ徴兵や徴用で引っぱられ、又よし上級学校へ入った処でそれが文科系なればどしどし兵隊にとられる物騒な世の中でしたので、よほど根性のあるもの以外はこぞって理科系の大学又は高等専門学校を受験したものでした。

この様な当時のことですから一人で四校も五校も受験する者がザラにあったことは申すまでもありません。私も中学の同級のものと同様に医専が出来たそうだから、まあ規則書でももらって来ようかということになったのです。さて調べてみると未だ学校の校舎というものが何処にもありません。よくよく新聞の説明を読むとどうも県庁で事務を扱っているらしいと云うので学校の帰りに県庁へ行ってみました。先ず驚いたことに受附の人が警察部へ行けというのです。あとでよくわかったのですが、当時は現在のように

に衛生部が独立しておらず、警察部の一課として衛生課というものがあつた訳なのです。何はともあれ、衛生課へ行つた処、確かに机一つだけある兵庫県立医学専門学校庶務所というものが有り、兎も角、規則書をもらつてその日は帰りました。さてまあ近所だし、若し高等学校(旧制)に落ちたときに兵隊や徴用に行くよりましだらう位の気持で受験しようかということにしたのですが、受験手続をした友達を受験場所は私の在学している中学(神戸一中)だということです。どうも何だかテレクさいというのでボヤボヤしていましたが、受験者が思ひのほか増えてとうとう神戸一中だけでは足らずに神戸二中も使うことになったという話です。医者にはなりたくないが死ぬよりはましだらう位に考えてただ何となく昭和十九年二月十八日その仮事務所におもむいて受験手続。受験料は十円、受験番号は一九一四、試験場所は県立第二神戸中学校。もらった受験者心得に空襲警報発令時(訓練の場合を除く)の心得として、試験開始時間又は試験中空襲警報ありたるときは当口の試験を中止し翌日より試験を開始す云々、とありました。受験地は神戸市と東京都と福岡市で受験者数は五三二四人、募集人員は一六〇名(実際に入学したのは一四五人)で、三十七人に一人の割だった訳です。

入 学 試 験

第一次試験は昭和十九年三月十日午前九時半より二日間
にわたって行なわれました。試験課日は十日が数学と国史、
翌十一日が理科物象と国語となっていました。入試に外国
語がなかったのは当時としては別に珍しいことではなく、
むしろ普通だったのです。英語は敵国語であるというとい
でもない戦争指導者の考えからで、今にして思えば学問の
世界によくまあそんなロゼックが通用したもんだと感嘆に
耐えません。入試問題の出題者は姫路高校(旧制)の教授
連、印刷は神戸刑務所で行なわれたとの噂でした。私の受
験場はさきに述べましたように神戸二中校舎、数学は五問
中確実に出来たと思つたのは二問しかありませんでした。
よほどわかる自信がなかったと見えて三月十一日の日記に
は、滑ること自信あり、遊び半分で試験を受く、と書いて
います。実は第二日は朝から春には珍しいどしゃ降りで
みぞれ混じりえその上昨日の出来がよくなかったものでは
すから全く気が進まず受けるのを止そうと思つたのですが、
親父に叱られて止むなく作ってもらつた弁当をぶら下げて
家を出ました。受験場に入って驚いたことは欠席者が実に

多く蘭が抜けたようです。自分も恐らくその一人だったの
でしょうから苦笑させられました。

さきに申しました入学率三十七人に一人とはこの第二日
の出席者からの比率で第一日の受験者との比は五十人に
一人位だったと思います。第一次試験の合格発表は受験案
内によると、三月二十日日本人に通知及び新聞登載となつ
ていましたが、実際は三月二十二日県庁の衛生課で発表が
ありました。翌二十三日には兵庫県内政部衛生課と印刷さ
れた横に兵庫県医学専門学校と学校の名称の誤つたをまづ
なゴム印のある封筒ではありましたが学校から直接通知が
ありました。数学の出来がまことに悪かつたものですから
合格通知を受けとつた時には昨日合格したことは知っては
いるものやほり何とも嬉しいかぎりでした。

第二次試験は生徒募集の規則では三月二十七・八日の両
日となつていましたが、合格通知では四月二・三の両日に
変更になっていました。試験場は元神戸市立第二高等女学
校校舎即ち現在の大学の基礎学舎で行なわれました。

四月二日は身体検査のみでしたが欠席者の多いのに亦々
驚きました。あちこちとかけて受験しているものが多いた
め一カ所が通る者は他所も大抵通るためなのでしょう。第
二次試験の通知を受けた者は募集人員の約二倍、三百名程

慶だったようですがおかげで第一次試験をパスした者はよほどの欠点がない限り入学出来るようになりました。身体検査は現在の四階生理・薬理実習室で行なわれ、翌三日の口答試験は現在の四階第一生理研究室や金子先生の部屋辺りで行なわれました。口答試験には松島元教授や赤松元講師がおられたように記憶しています。四月五日現在の楠中学の北側の道路に面したレンガ塀に合格者名の書いた紙が貼られられました。私は当日はその塀の中も兵庫医専の構内であると信じていました。

開 校 式

翌四月六日に合格通知が自宅へ郵送されて来ました。入学心得には、一、学生ハ繼テ校内寄宿舎ニ寄宿セシムルニ付キ時局納入困難ナル蒲団、洗面器具、食器類、其ノ他身ノ廻品等を予メ発送シ置クベシ、三、米其ノ他ノ諸物資ノ配給申請ニ必要アルニ付転出証明ニ因スル諸手續を完了ノ上入学式前日午後一時迄ニ携行スベシ、四、本校正規ノ学生服未ダ準備ニ到ラザルニ付入学式当日ノ服装ハ清潔ナル出身学校ノ制服又ハ之ニ準ズル服装ニ巻胸洋ヲ着用スベシ、云々。とあり、学生は総て通学を許さぬたてまえとなつています。学校から一時間もかからの処に住んでいて

食べるものもろくにない時に寮生活とは殺生など早速学校当局へ問い合わせました処、学校の方も学生全員を収容する寄宿舎の設備は目下なく当分は通学で結構ですとのこととでやれやれと思いました。寄宿舎に本当に入った人は三十名余りだったと記憶しています。場所は現在の基礎学舎の四階東側の辺りでした。当時の木製のベットのほ今でも基礎の教室では方々で使われています。

入学心得に従い、四月十五日入学誓書に戸籍謄本及び入学金十円也を添えて入学手續を終わりました。同じ日の日に、パイロット万年筆を阪急にて求む、税共で六円十二銭。と書いています。

入学手續のとき、四月十九日午後一時学校へ入学者全員集合セラレタシ。との事でしたので当口行ってみますと何とこの間迄神戸一中で国漢の教師をしていた真川伊佐雄氏が入学についての細々とした注意をしたのには驚きまし



兵庫医専時代の校章

た。先生何時の間にやら生徒主事兼教授になっていたのです。この先生がこれから色々と話題を呈供する主であるとは知るよしもありませんでした。

入学心得にある本校正規の学生服は戦争が次第に激しくなった為とうとう縹の目を見ずに終りましたが、製帽の方は当日帽子屋が出張して角帽と戦闘帽を売りつけました。角帽は儀式のとき、戦闘帽は平素にかぶれとの事です。徽章は。医。の字に。兵。の字を重ねたものでどう見てもお世辞にも美術的なものではありませんでした。

愈々四月二十日午前九時過ぎより開校式兼入学式が現在の基礎学舎四階の大講堂で行なわれました。初代校長は県立神戸病院々長だった小川瑞五郎先生、出席した生徒数は一四二名、式次第を書いたメモがありますので転記しますと、

兵庫県立医学専門学校開校式次第

神事次第

- 一、職員生徒整列 午前九時四十分
- 一、来賓一同着席 午前九時五十分（振鈴）
- 一、齊主首員着席 午前十時
- 一、修祓 一同整折
- 一、降神之儀 警蹕 一同整折

- 一、献饌
- 一、齊主祝詞奏上 一同整折
- 一、清祓
- 一、玉串奉奠
- 一、撤饌
- 一、昇神之儀 警蹕 一同整折
- 一、齊主首員退下

式典次第

- 一、開式の辞
 - 一、宮城遙拝
 - 一、国歌斉唱
 - 一、祈願折念
 - 一、勅語奉読 知事
 - 一、知事式辞
 - 一、文部大臣告辞
 - 一、来賓祝辞
 - 一、学校長挨拶
 - 一、生徒総代の辞
 - 一、閉式の辞
- 直 会
- 一、祝 宴

となつています。生徒時代の辞は赤沢平君が述べたと記
載してあります。

開校当初の学校の規模の説明にはちようど手もとに本学
最古の学校観覧がありますのでそれをそのまま転記するこ
とにいたします。

兵庫県立医学専門学校概観

当校ハ昭和十九年一月十八日設立認可、四月開設以來二
箇月ノ専門教育初程ニ過ギザルモ附屬医院タル元県立病院
ハ明治二年創始以來數十年ノ歴史ヲ有シ漸次鞏健ナル發展
ヲ遂ゲ殊ニ昭和六年現本館ノ新築成ルニ及ビ内容ノ充実ト
研究施設ノ整備トヲ加ヘ之ニ依リ学位受領者六十名ヲ超エ
診療ノ実績ト共ニ内外ノ信望加ハリ全国屈指ノ病院トナレ
リ、恰モ時局ノ要望ト共ニ年來ノ声タル医育機關設置ノ興
論熾ントナリ県ハ市当局並ニ財界諸賢ノ絶大ナル支援ヲ
得、本年一月臨時県会ノ議ヲ經テ設立決定、直ニ認可ヲ得、
四月コリ授業開始ノ運びトナリ神戸市提供ノ本校舎ニ依リ
目下改造設備ノ充実ヲ急ギツ、四月入學式以來一回ノ欠
課ナク、授業ハ勿論訓練繼續ニ勤ミ、教授講師ハ当局ノ諒
解ヲ得、實際訓練上甚モ支障ヲ見ザルモ正式発令ニ接セザ
ル者一部アレバ茲ニ担任課日ト人名ノ列記ニ止メ順序席次
不同ナルモ概要ノ一端ヲ示シテ參考ニ供ス

| | |
|----------|--|
| 一、名 称 | 兵庫県立医学専門学校 |
| 一、所在地 | 神戸市東区楠町六丁目 |
| 一、設立認可 | 昭和十九年一月十八日 |
| 一、建物坪数 | 学校 鉄筋四階建 延二、一八七坪 附屬医院 鉄筋及木造建 延七、九一三坪 |
| 一、学 年 | 四学年 |
| 一、生 徒 定員 | 六四〇人 一学年 一六〇人 |
| 一、本年度志願者 | 五三二四人 |
| 一、入学者 | 一四五人 |
| 一、職 員 | |
| 学 校 長 | 小 川 盛五郎 |
| 教 授 | 内科血行器学 物理療法学 大 高 誠 修練訓育軍隊医学教務課長 分 玉 眞 産科婦人科学 村 上 清 内科呼吸科学 臨床病理学 中 院 孝 円 内科新陳代謝学 臨床医化学 竹 田 正 次 解剖学生理学 生物学 勝 義 孝 細菌微生物学 岡 部 井 和 道徳人文生徒課長 眞 川 伊 佐 雄 生徒主事兼教授 |

外科学
内科胃腸科学栄養学

講師

国民衛生医事法制国民体力

組織学解剖学

医化学

独逸語学

解剖学

物象数学生理学

修練

薬理学

組織学

衛生学

病理学

航空医学

小兒科学

耳鼻咽喉科学

外科学

齒科口腔学

小兒科学修練

助教授

解剖学

生理学

石川善衛
寺水重樹

赤松秋太郎
島田吉三郎

松島周蔵
橋寺太郎

武田一創

岡田徳一郎

高田八郎

中沢与四郎

藤田武夫

六磨雄

福谷温

高田時

鈴木時

中村良太郎

藤田登

前田次郎

船木宗幸

片岡登

大木佐

医科学

助手

医化学

配属将校

陸軍大佐

武道囑託

剣道評士六段

柔道教士六段

事務長(兼)

書記兼助教授

書記

同

横村博介

村松すみ子

徳岡政之介

崎本武士

時実克巳

松島民蔵

近藤保

西垣藤一

丹原彰雄

同

同

同

同

とあり、つぎに生徒氏名として赤沢淳平君以下、四五名の名前、本籍、出身校が載っています。一学年は四組にわかれていましたが、時局に迎合したというのでしょうか、第一学年とは呼ばずに第一中隊と称え、一組から四組までを第一小隊、第二小隊、第三小隊、第四小隊と呼んでいました。従ってこの学校概覧にも第一中隊、第一小隊……というぐあいに印刷されています。また副校長格である分玉興先生は陸軍々医少将でしたし、少なくとも表向きは本学はミリタリズムの厚い衣を着て発足したのでした。

講義開始

入学式も無事終り、愈々講義が順調に開始されましたと書きたいところなのですが、イの一番の講義はそう簡単に始まりませんでした。と申しますのは入学式を四月二十日迄遅らせても未だ講堂もろくに出来ておらず（とうとう終戦迄完全なものが出来ずじまいでしたが）講義の準備も恐ろしくなかなかに合わなかったのだと思います。然し入学式が終わったのですから翌日から学生一同は規則通り八時半には登校致しました。こういう訳で五月の始め頃迄は戦時下でありそうやたらと休講にする訳にも行かず、学校当局は何とか時間の穴埋めをせねばならなかったのだと思います。

四月二十一日（金）は八時半校庭——現在の基礎学舎の芝生の植っている中庭——当時はアスファルトが敷いてありました——に集合、直ちに湊川神社に正式参拝を行いました。正式参拝とは学生は、いや当時は専門学校でしたから正しくは生徒と呼ぶのでしようが制帽のうち正式の方即ち角帽を冠り、教官は国民服に身を淨め、神主さんが出て来てお祓いをし、玉串を代表が奉奠したように覚えています。そのときは副校長格の分玉巽先生（故）——当時は分玉閣下と

呼ぶようにいわれていました——は陸軍々医少将でしたので金ピカ服にやたらと勲章や従軍勲章やらをつけて来られていました。神社参拝の後、湊川神社の歴史を宮司から聞いたりなどしましたが、学校から目と鼻のさきにある楠公さん迄行ってそう時間が潰せるものでもありません、十一時には学校へ一同戻り昼食となりました。午後は一時から附属医院見学ということで唯やたらと病院の廊下を歩かされた後、今日はおしまいということに相なりました。

翌四月二十二日（土）は昨日より三十分遅くなつて九時始まり。学校へ行ってみると、先ず中学校なみに朝礼で、生徒主事の真川伊佐雄氏の号令で始まりました。それが済むと今日は海洋気象台へ見学に行くとの事です。松島周蔵教授引率のもとに生徒一同そろそろと中山手の高台迄歩いて行きました。気象学に関する予備知識がない上に気象台に別に興味がある訳でなく、一同気象台のドームのある屋上へ上つてワイワイガヤガヤ日向ぼっこを決めこんでいたところ松島先生に一喝くらつてしまいました。これが本学での一番最初に教官が学生を叱った記録だと思えます。一回叱られたせいでもないと思えますが上臆だということに午後は学校へ帰って教室の掃除をさせられ、逃げて帰る程スレてもおらず、唯ブウブウ云い乍ら、兎も角、箒や

バケツを動かしました。

翌月曜日四月二十四日からはポツポツ講義らしいものが
 始り出しました。

その講義内容は学期によりますと次のようになっていま
 す。

| 一学年 | 一学期 | 二学期 | 三学期 |
|-----------|-----|-----|-----|
| 修身 | 一 | 一 | 一 |
| 外国語 | 四 | 三 | 三 |
| 数学及物理学 | 四 | 一 | 一 |
| 生物学 | 二 | 一 | 一 |
| 解剖学 | 〇 | 八 | 一 |
| 組織学 | 四 | 四 | 五 |
| 生理学 | 二 | 八 | 三 |
| 細菌学 | 二 | 三 | 八 |
| (第二学年に続く) | | | |
| 化学及医化学 | 六 | 六 | 六 |
| 病理学 | 一 | 一 | 一 |
| 保健医学及衛生行政 | 一 | 一 | 一 |

(数字は毎週授業時数を示す)

橋寺先生のことなど

講義が始り出して先ず度胆を抜かれたのはドイツ語の時
 間でした。第一時間日、日ばかりギョロつかせた(私達は
 そこで早速「Age」というニックネームを差上げました)
 丸坊主の見るからに難しそうな教官がツカツカと講堂に入
 って来られました。この先生がこれから一年余り夢の中
 も忘れることの出来なかつた橋寺太郎先生(故)だったので
 す。先生は開校と同時に和歌山高商の教官を辞して神戸へ
 来られたと記憶しています。挨拶も済むか済まないうち左
 手をポケットの中へつつ込むや小さく盛んだ木綿のハンカ



橋寺太郎先生

チをとり出して私達の鼻先へ突きつけられます。その氣遣にたじろぎ乍らハンカチをみますと、布一ぱいに *Ich liebe du habst, er liebt*……と弱変化動詞の変化が墨痕鮮かにぎっしりと書かれてあります。黒板に書けばよいのにハンカチを無駄にしてもつたいないな(当時は木綿は米と同様大変な貴重品だったので)と私は突差に思いましたがそんなのんびりしたことは云っておれなくなりました。先生が一度読まれたら直ぐ学生に次から次へと鼻先へハンカチを突きつけて読まされるのです。それがすむと頼みのハンカチをポケットへ探ち込んでポンポンと当てられます。若しチョットでも間違ったら、今日習ったところを百遍書いて明日迄にもって来い。とつばきを顔一杯にかけられて怒鳴られます。私も脳くも百遍組に入られました。こちらは第一時間日だし発音の学び方や *die, der, die* の類だろうとたかをくくっていましたのいやは大変なことです。同じ文章を百遍も書くなんて肉体的労作に等しいのですが先生は絶対に許してくれません。その日は第一日目でそれでも先生おとなしかったです。翌日からは、百遍をサボって来た者やその日の答えに間違いの多かった者は撲られるか、罵られるかを覚悟せねばなくなりました。特にこれは、一騎討。と先生が名付られた小テストの日に被害者

が続出しました。現在の学生諸君にはおそろくかかる野蛮な教育は想像に絶すると思いますが先生は先生なりに。戦時中のため講義時間は短かくなつたが学力を落すわけには行かない。私は小川校長に対して責任がある。と云う信念があつたのことで別に学生をいじめるためにされたのは絶対になかつたと思います。

先生は思想家としても高い識見をもっておられ又強い反戦論者でもありました。官憲の日のきびしい時節にこちらの方が先生大丈夫かなと思ふ位の発言を教室で平気でされました。例えば大本營が景氣のよい艦八百の戦況発表をしているさ中の独作文の時間に、日本の連合艦隊は全滅した。東条はワシントンへつれて行かれるだろう。などと云うすさまじい作文を作らされたりなどしました。

私は先生が第一日ポケットからハンカチをとり出されるとき左手でと書きましたがその後もずっと右手は使用されませんでした。と申しますのはポリオのせいだと聞いておりまして右上肢が非常に不自由な様子で従って黒板は一度も使われずでしたし、学生を撲られるときも常に左手でしたがパンチは可りのものがありました。従って私達は入学以来医学の専門課程を勉強するよりも如何にしてドイツ語の時間をやり放けるかに専心努力する結果となりまし

た。

学生のこの風潮について教授会でもかなり問題になり、小川校長からも橋寺先生に行き過ぎではないかとの注意があった様子でしたがそんな事で自分の信念を認めるような先生ではなかったようです。

当時講堂の施設はデタラメで基礎学会四階のお化けの出るような講堂（現在の新装なった第一生理学教室の場所になります）で火の出るような、又み方によっては漫画のようなドイツ語のレッスンが行われたのです。私の日記にも、今日もとうとう百遍になった。とか。〇〇君が撲られそうになったので椅子から飛び上って逃げた。とか云う文章がバラバラめくっただけでも出てまいります。

そのおかげと云いますと妙なのですが二学期からはゲートのファウストを副読本に使用する位に上達しました。一方医学校のくせに解剖とか、生理、医化学などと云う学問はそっちのけになってしまいました。が私のように敗戦後新設された大学の予科の方へ行き直す者にとっては文科系の連中が学徒出陣で否応なしに引っぱり出されているときに本当によい勉強が出来たと今でも感謝しています。

学会のこと

開校にあたってその母体となった県立神戸病院が附属病院（当時は他の医大・医専と同様正式には附属病院と呼んでいましたが）となったことは勿論でしたが新たに設けられる基礎学会については神戸市から湊川公園西にあった市立第一高等女学校（現在の川池小学校）の校舎か、市立第二高等女学校の校舎か何れかを譲りうけることになり、結局病院に近いと云う理由から市立第二高女に決ったのとでした。これが現在も使用されている基礎学会であります。これは神戸市最古の鉄筋コンクリート作りの校舎だそうで既に当時から今にも崩れそうな老朽建築物でありました。

当時の学校の公式の記録には何れもその建物全部が基礎学会に使われていた様に書かれてありますが実は建物の四半分のみが兵庫医専、東半分は何と兵庫原立航空工業学校と云う新設の中等学校の校舎となっておりました。一階でいうなら現在の法医学教室の半分を残して、各階共それより東は他人様の学校、しかもニキビ盛りの小僧の学校で、ワイワイガヤガヤ全く大変なものでその境界に立てられた杉板にゴウゴウと反響しておりました。

もともとこの建物は市立第二高女当時も、その東半分は市立女子商業が使っていたそうで、もうつぶしてしまいま

したが第一病理学教室の東側にあった門がそちらの学校の正門で、ついでこの間迄その門から学舎への入口のところ、大理石に刻まれた市立女子商業学校の字が墓の下から読めていたのはご存じの方も多いと思います。

講義は始まりましたが基礎学舎の改築は戦時中の物資不足のせいもあり遅々として進みません。研究室はおろか、講堂の改修もさっぱりです。私達はただ広い四階の大講堂に机を持ち込んで講義を受けたのです。講義を聴く方も大変でしたが、する方はなお大変だったと思います。あの馬鹿でかい講堂で声を通すのは並大抵のことではなかったのです。時々講堂の窓の破れから楠公さんの鳩が飛んできて御真影(天皇・皇后兩陛下の写真を安置した紗戸棚、講堂の正面に作られていた)上にとまってクックッと鳴いたりなどしました。改修の進まぬので困ったものに便所がありました。もともと女学校だったので男子用が少ないのはあたり前です。全く笑えぬことばかりでした。四階講堂控室(現在の第二解剖助教授室)の前の廊下には仁孝天皇第八皇女で徳川家茂の室、当時婦人の鑑とされていた和宮親子内親王の立像がずっとそのまま置かれてありました。現在の様にクラスの一割以上も女性が占める学年もある時代ならとも角私達は男一色なのでから毎日これを眺

めると何となくすぐぐたいし、婦道の鏡の像も手もち不沙汰だったと思います。

- | | |
|-----------|-----------|
| 1 | 基礎学舎 |
| 2 | 病院本館 |
| 3 | 川崎寮 |
| 4 | 内田寮 |
| 5,6,7,8,9 | 病舎 |
| 10 | 常盤寮 |
| 11 | 伝染病棟 |
| 12 | 研究室 |
| 13 | 屍室 |
| 14 | 職員合宿所 |
| 15 | 官舎 |
| 16 | 賄所及び看護婦宿舎 |
| 17 | 看護婦宿舎 |
| 18,22 | 洗濯寮 |
| 19,21 | 浴室 |
| 20 | 賄所事務室 |
| 23 | 自動車庫 |
| 24 | 貯水槽 |
-  は現存せる建築物
 は戦災その他により現存せぬもの



開学当時の本学の見取図

春から夏

夏休みまでの大小の出来事を私の日記からHを追って抜粋してみますと、

四月二十八日(金) 始めて解剖の講義あり。解剖の講義はマクロを勝義孝先生(京都府立医大名譽教授・現在關西医大教授)と武田創先生、ミクロが島田吉三郎先生(故・京都府立医大名譽教授)の担当となる。

四月二十九日(土) 天長節。九時より病院と合併の式あり、看護婦も殆んど全員出席す。

五月一日(月) 体練。なる時間が週に一回あり、小川校長が精神訓話をされる。

五月三日(水) 時間割がうんと詰まって来た。これからずっと午前四時間、午後四時間となる。しかも教練が週四時間とは。

五月五日(金) 夕方訓練空襲警報が鳴り、符辨訓練。この頃はまだ空襲の訓練でずんでいた。

五月八日(月) 詔書奉読式、淺川神社へ参拜。これから後終戦の月まで毎月八日には同様の儀式あり。衣料切符二点出してゲートルを買う。

五月九日(火) ノートの配給、一人五冊、金八十銭也。

五月十日(水) 毎週水曜日のひるは学生が十名前後のグループに分れそれぞれ教官の部屋で会食することとなる。

五月十三日(土) 病院の中庭(現在の中央病棟の建っている辺り)の美しい芝生を刈がして開墾し、さつまいもの苗を植える。

五月十五日(月) 松島周蔵先生黄道とこのことで化学は休講。

五月十六日(火) 解剖学は骨字の講義が終る。

五月二十日(土) ラテン語の試験あり。授業料九十円也を納める。

五月二十二日(月) 青少年学徒に勅語を下し給わりたるH。とかで赤々儀式。学校は式ばかりやっている。

五月二十五日(木) 淺川神社例祭。これは今も昔も変わりない。近く化学の試験がある。困った。とH記に書いている。

五月三十一日(水) ドイツ語の講義をリボったのがばれて大いに編寺先生からしほられる。

六月二日(金) 化学の試験ありカンニングをしたものについて大騒ぎとなる。

六月三日(土) 教練の教官に新任の中尉米校。三日程して彼の中尉思想問題とかで解任となる。教務の否定にも拘

らずニヤ中尉だったという噂広がる。

六月六日(火) 日記に、鳥田先生の学問に対する態度には頭が下がる。と書いてある。アイク率いる連合軍ヨーロッパ大陸へ上陸。所謂第二戦線開始。

六月七日(水) 学生控室の黒板に学校当局を批判する落書あり。一口中騒がし。

六月九日(金) 血液型判定の実習あり。これから夏休みにかけて国民学校(現在の小学校)などへ駆り出される。腕の方は頼りないものなり。

六月十三日(火) 解剖学は骨学実習始まる。

六月十五日(木) 本物の警戒警報発令。大急ぎで自宅へ逃げて帰る。

六月十六日(金) 学校警備のため学生も四、五名一組となり当直させられることとなり教室に燈を敷いて寝る。現在の第一解剖学教室の辺りだったと記憶している。夕食も朝食も梅干しの入ったおむすびが運ばれる。今なら誰も見向きもしないしろ物だろうが、当時どうやって乏しい食糧から拾り出したのか、とも角病院としては大森殆してのことだったと思う。

六月二十日(火) 学校の報国団結成式。学生は勿論、教授も事務員も国民服、戦闘帽、巻ゲートルで深川神社参

拜。当日開校記念品として学生一人一人にネーム入りの万年筆を学校からもらう。

やっと学生も学校の生活になれ、学校当局も運営に馴れてどうやら学校らしい調子が出て来たと思ったら夏休みのシーズンになりました。今だったら七月に入ったら早速夏休みとなる勘定ですが、なかなか休みを頂けそうにありません。同じ年令の青年は前線で、銃後の工場で血み泥になつて戦っているのだ。貴様等はたるんどる。というわけです。

夏休みとは名ばかりで二学期へ

昭和十九年も七月に入ると敗戦の色がずっと濃くなって来ました。春さきは木だ空襲もどっちかというとお祭り騒ぎのようなものでしたが、七月四日、八日と本物の空襲警報が発令され、七月十九日にはサイパン島玉砕、翌二十日には東条内閣総辞職と決まりました。

学校の行事を引き続き日記から抜萃してみますと、七月四日(火) 石川善衛教授より急に救急法の講義並びに実習。

七月十日(月) より十七日(月) まで 第一学期試験。十日化学、十一日解剖(冊・武田先生)、十二日生物、十

三日ドイツ語、十四日微生物、十五日理数と修練、十七日解剖(島田先生)。その結果化学は九十数名の大量再試験が発表され、学生は大恐怖。ドイツ語の試験問題があまりに難かしいと小川校長驚かされる。

七月十七日(月)より二十二日(土)まで、数班に分れて市内の国民学校にて市民の血液型検査の手伝いをする。

私が行ったのは十七日荒田校、十九日神楽校、二十日大黒校、二十一日池田校、二十二日林田校。

七月十八日(火)病院の剖検室(現在動物実験などに使われている清明堂西隣の建物)にて日播の剖検あり、学生一同見学す。執刀は中野孝田教授。



小川五郎先生

七月二十四日(月)八月三日まで午前中は講義、午後は舞子の浜にて海水浴いや。水練。と決定。舞子に小川校長のご親戚とかの立派な別荘あり、これが我々の脱衣場兼休憩室となる。この水泳の時間だけは現在の学生諸君も、もし見られたら羨むであろう。

阪大岩田正俊先生の寄生虫学(熱帯医学)の講義始まる。

七月二十七日(木)福原一彦君学徒幹部練成とかで三重県某所へ出発。

八月三日(木)水泳おさめの式。小川校長の元気な泳ぎに感心する。当時先生は既に七十歳にあと幾らもなかったはず。後で学校当局より、おはぎ。が出る。そのうまかったこと。

八月四日(金)一学期終業式、これで愈々夏休みが買えることになる。当時のこととて夏休みなんていったら大変。痛省修練期間。と称す。それもたった二週間、しかしこの口もいつ空騒があるかわからぬとのことで急に病院中庭に防空壕を作ることとなり、壕を十数ヶ所から掘らされる。作業中。お十時。にと病院から一人に三つずつ握りめしが出る。

八月十七日(木)早々と休み明け。再び毎日講義、講義

と尻を叩かれることとなる。

八月二十日(日) 夜半より警戒警報、次いで空襲警報。

北九州はじめてB29六〇機により爆撃さる。

八月二十一日(月) 早朝より再び警戒警報。学校は昨夜のはじめての空襲警報で休講。

九月一日より愈々正規?の二学期が始まることになりました。この頃になりますと益々食うものがなくなり、食堂はどこへ行っても雑炊だけ。しかもこれが長蛇の列、空襲ははげしくなり昨日空襲警報が出たから今日は疲れ休みで一口休講などといっていたら毎日休講せねばならないような状態になって来たのです。

昭和十九年二学期の日記抄

九月四日(月) 病理学、内科学講義始まる。組織学実習。久しぶりで牛肉にありつく。百匁十六匁なり。

九月十三日(水) 化学の再試験あり。何と八十数名も受験させられる。

九月十八日(月) 阪神地方に台風来る。被害甚大、工場など三カ月は操業不能とのこと。

九月二十五日(月) 勤労奉仕を十月になるとせねばなら

ぬという。分玉副校長は絶対反対とのこと。分玉先生大いに頑張れ。市電学生定期購入三カ月で十匁五十銭。

九月二十九日(金) 分玉先生より一学期の成績発表あり。

十月三日(火) かねて噂さの遠方への勤労奉仕の出勤はなくなった旨告があり、ただし神戸市内で形ばかりのものはせねばならぬという。止むを得ぬだろう。新聞紙上に阪大入学式の神社参拝に数十名が途中でエスケープしたとの記事が載っていた。いずこも同じようなことをしている。生理学講義始まる。

十月五日(木) 軍隊医学開講。

十月六日(金) 田部井教授(現在京大微生物教授) ジェング熱のため休講。各地でジェング熱流行す。

十月十六日(月) 休練の時間に野球をして遊ぶ。野球は激性スポーツとのお上よりのお迷いで他の学校では早くより白熱していたが、本校では中止さすべき教練の教官が大の野球好きのため大びらでやっていた。

十月十八日(水) 朝刊に満十七才以上の男子は現役兵になるとの発表あり。

十月二十一日(土) 野球、通学生4-1-1寄宿生。寄宿舎に賊入り学生の貴重品盗まる。

十月二十三日(月) 解剖の時間に中野次郎君(現在滯米中)が先日の泥棒を見つけ、講義を放っぽり出して一同病院に入ったという泥棒を探すも見当たらぬ。

十月二十四日(火) 教練教官来らず亦野球す。こんな気楽な日もあったらしい。

十月二十五日(水) 連合艦隊遂に比島沖へ出動。大本営発表ではわが戦艦一沈没、一中破、敵空母六撃沈というのが……。

十月三十一日(火) 大東亜省より満州開拓医募集に係官来校。説明会あり。大本営発表、神風挺身隊(特攻隊)の戦果、空母九撃沈?

十一月一日(水) 大高教授(故)の内科学の試験あり。学校よりの帰途大枚十円を小銭に替えるのに困る。世の中が不親切になった。と日記に書いている。

十一月二日(木) 学校へ勤労奉仕に本校の学生が出動しないことについての投書あり。そのためやはり勤労動員あるとの事、つまらぬことをするものがあるものなり。教練亦々休み。

十二月三日(金) 明治節、例年になく朝から雨。九時より式、式後、医専在郷軍人分会結成式あり、分会長分玉閣下、副分会長石川教授。湊川神社へ傘などさきさき、雨中

行進。今日は明治節のためか雑炊屋(街の食堂はすべて雑炊屋に変わっていた)が朝から無制限に食わせる。

十一月七日(火) 解剖学試験。

十一月八日(水) 比島方面最高指揮官山下大将となる。

十一月十日(金) 手術見学を始めてみる。教授との会食久しぶりにあり、竹田教授(現県立加古川病院長)なり、第一印象。人づきの悪い人なり。

十一月十一日(土) 午後京大病理森茂樹教授の休質についての講演あり。

十一月十三日(月) 多井畑へ勤労奉仕に行く。裏道遊びをさせられる。

十一月十五日(水) 成績の悪いもの六名校長室に招かれる。

十一月二十一日(火) 教練の時間に雨が降ったので雨宿りをしたのが見つかかり、上衣を脱がされて雨中で教練をさせられる。全くの濡れ鼠。よく風邪を引かなかつたものだ。

十一月二十二日(水) 食糧不足のため遂に寄宿舎解散の発表あり。

十一月二十四日(金) 寄宿舎の椅子を火にくべたもの真川氏にみつかかり、一日停学。東京七〇機にて空襲される。

十一月二十七日(月) 新任の軍事教官来る。大橋中尉と

いう。先生は横浜高等の野球部出身ますます野球狂となる。空襲警報、東京、名古屋、鹿児島やられる。

十二月二十八日(火) ドイツ語試験。Goethe の Faust 中 Keuter の場面より出題。

十二月五日(火) 学校から父兄会の案内状、成績と共に来る。

十二月七日(木) 生理学試験。中腕孝四教授の灘五毛の邸宅からピアノをもらい大八車に積んで学生十数名が学校まで引っぱって帰り、講堂に入れる。大空襲必至とかで国民学校と中学下級生は十口まで休校、巷に緊張感みなぎる。

十二月九日(土) 米六合学校で特配される。勤労奉仕に行ったりための増配とか。父兄会中止に決定。

十二月十日(日) 午後一時すぎ警戒警報発令、それと直ちに学校へ行く。着いたときにはとっくに解除になっていた。

十二月十五日(金) 敵機阪神地方に侵入、偵察らしい。

十二月十九日(火) 今日より二学期定期試験。十九日ドイツ語。二十日化学、人文。二十一日生理、理数。二十二日病理、外科、細菌。二十七日内科、修飾。

これで波乱に富んだ昭和十九年も終り、歳よ前途まっ暗

な昭和二十年を迎えることになったのでした。

昭和二十年となりて

一月一日には午前九時より講堂にて四万拜の式が催され、学生四十名余出席、小川校長より訓話がありました。三学期は八日(月)より始まり、先ず例により藤川神社に参拝し身を清めてから講義が始まった訳です。ところが年末より次第に激しさを増した敵機の空襲は年が明けると共に一層激しくなり、警戒警報が鳴ると共に講義は中断、教官も学生も待避と云うことになるのですから講義の進行は思うにまかせぬようになりました。学生の欠席は日にみえて多くなり又元氣すぎて学生の方が群集した橋本先生のドイツ語が珍しいことに十三日(土)に休講となりました。十七日(水)の時間には先生は一応出てこられました。何時にもなく元氣がありません。先生は食糧難のため栄養失調症になられたのです。

一月十一日に本校第二回生入学試験の第一次発表が行われました。

昭和二十年度入学志願者心得には第一、資格として、本校八専門学校令に依り医学ノ要綱ヲ教へ、医術ノ真諦ヲ授ケ、斯道研究ノ素地ヲ培ヒ以テ皇國医道ノ本業ニ徹セシメ

進んで負荷ノ大任ニ対ヘマツル医人ヲ練成スルモノナリ、
依ツテ右ヲ休庸シ左ノ各項ノ一二該当スル者タルコトヲ要
ス。とあり、入学試験期日は文部省の定めた第一期、そ
の選抜方法は文部省の指示により、第一次選抜並衡。は
山身中等学校長よりの報告書類によつてのみ選衡され入学
者定員の約二倍の人数が選抜されました。この方法は何も
本校のみに限つたものでなく交通機関が軍にとられてしま
い、一般市民の利用が極度に制限され、又食糧難のため旅
館などの宿泊も思うにまかせず、全国的に学生を集めて入
試を行うことが不可能に近くなつたため止むを得ず文部省
がとつた手段だつたようです。

二次試験の方は一月二十三日(火)より二十六日(金)迄本
校で身体検査、口頭試問及び筆答試問が行われたようで、
その結果総合判定により一月三十一日(水)に合格者が発
表され、始めて我々のクラスの第分が決まつたのでした。

話が前後しますが一月十九日(金)午後一時すぎ、内科
診断学の講義中でしたが、例により警戒警報の陰気なサイ
レンの音が鳴りわたり、間もなく空襲警報のサイレンの音
に変わりました。私達はその頃待避場所を基礎学舎の南の校
庭に下る傾面の下(現在の運動部の倉庫)に逃んでおりま
した。思い思いに鉄兜やら綿人の頭巾やらを覆つて退屈な

講義はなくなるし、ほつとした思いで三々五々その辺りに
集つて煙草を喫い乍ら雑談をしていたのですが急に、激し
い高射砲の音がするではないですか。

南西の空を見るとB 29の大編隊が可なりの低空で正しく
こちらへ向つてまいります。しまつたやられたと思つた途
端、ドドと云うものすごい地響き、最後の編隊が頭上を通
り過ぎたときは本当にやれやれ助かつたとお互に喜び合
いました。後でわかつたのですがB 29は全部で五〇機、この
空襲で明石の川崎航空機工場は一瞬にして潰滅してしま
いました。てっきりついその先の新開地か川崎造船でもや
れたと思つていたのですが、二十+近くも離れたところが
やられていたわけだつたのです。

しかし一月二十日(土)午後には武田創教授より解剖実
習の注意があり、今も同じ場所の実習室で一月二十九日
(月)より二月二十四日(土)迄連日、記念すべき本学第一
回の解剖実習が行われました。二月四日(日)には再び神
戸は空襲をうけ兵庫の海岸近くにあった製粉工場はまる二
昼夜燃え続け、神戸の巷は次第に焼け爛れてゆきました。

そうこうするうちに八日(木)の朝刊をみますと私達にと
つて大変なことが載つてゐるのです。紙上では具体的な
ことはよくわからなかつたのですが、戦況の切迫に伴い学

生の入営延期が殆んど認められなくなったと云うのです。従来は理科系大学・高専の学生は卒業迄兵隊にとられることは勘弁してもらえ、きまり。となっており、小生などもつい先日徴兵検査は受けたのですが大威張りで入営延期願いを出してやれやれこれで四年間命が延びたとほっとしていた矢先きだったのです。よく読むとどうやら医学関係の学生は延期が認められるらしいのですが、一年でも浪人して入学したものは延期が認められない様子なので、その日の教室はこの話で持ち切り、兵隊へ送りこまれるか学生々活をのんびり楽しめるかの瀬戸際ですから一冊真剣をのものを、比較的のんびりしていたのは中学四年修了で入学した若下の人ぐらいでした。

忘れもしない三月十七日

学生間でもめにもめた入営延期中止かどうかの問題も二月十三日、副校長格の分玉少将よりの説明で医科に関する限り従来とあまり変りがないことがわかり、学生一同やっと思入れることが出来ました。しかしその頃になると軍の方の事務も粗雑となり入営延期届を出しても連隊区司令部の方で誤って召集令状を出す様な事態が発生したりなどしました。一旦召集令状をもらった被害者？はいくら

徴兵延期の権利のある学生でも入営せねばならず学生の中に二、三人そんな訳で召集令状をもらったものが出て来ました。こんな入営者が発生するとその都度、軍側であるべきはずの配属将校たる徳岡政之介大佐がその連隊へわざわざ出かけていってうまく事情を説明し学生を貰い受けて来られるのですが、その情には学生達ただただ感謝あるのみで、先生頼みます。の連発だったわけです。

空襲の方は激しさを増すばかり、ちよっと日記を綴っただけでも、

二月十六日(金) 東京へ艦載機延千機来襲。

二月十七日(土) 今晩は阪神地方へ来襲かと思つたがやっぱり東京やられる。

二月十九日(月) 夜三度も敵機来り、大阪湾に機雷投下。

二月二十二日(木) このところ、毎晩敵機一、二機来る。

二月二十五日(日) 早朝より雪、夕方には二十センチ、午後敵機来る。夜東京へ七三〇機来襲。

三月四日(日) 東京へB29一五〇機、又雨、日増しに暖くなる。

三月六日(火) 学校へ防空宿直。

などと書いています。

学課の方は二月二十六日学年試験の日課が発表され、三月十二日(月)ドイツ語、衛生学。十三日(火)内科、教練。十四日(水)内科、化学。十五日(木)細菌、人文。十六日(金)生理、病理。十七日(土)解剖と決まりました。しかし学生の間では専ら近く神戸も東京、名古屋と同じく大空襲を受けるに違いない、学年末試験が本当にやれ



島山吉三郎先生

るかどうかという心配か希望か？わからない今の学生諸君には到底理解出来ない気分が漂っていました。こんな何とも云えない、強いて云えば己の生命への本能的な危険を感じ、もはや勉学どころでなくなった我々に勉強しろなど一言も口にされずに、唯坦々と休講もなく講義をされたのは解剖学の島山吉三郎先生でした。さきにも述べました解剖実習中にも警戒警報が度々鳴りましたが、学生陣が慌てて、それ実習はこれ迄とばかり実習室から逃げるように飛び出して行っても最後迄学生のためにピンセットの手を止められない先生でした。

心配していた阪神地区の大空襲は一向になく、定期試験第一日、第二日と迄は予定通り平穏に進みました。

三月十四日(水)早朝とうとう来るべきものが来ました。

空襲警報!! 只今敵機約九〇機は尾鷲上空に集結中、阪神地区への来襲の公算大。とラジオが報じ終らぬうちに大阪は焼夷弾の洗礼をうけ、焰、天を黒がし、尼崎市北郊の私の家辺り迄真昼のような明るさになりました。この空襲の最後の編隊の攻撃で父が開業していた尼崎の医院も灰燼に帰ってしまったのです。その日は定期試験の第三日、内科と化学だったわけですが、どういふ風にして受験したか、日記にもありませんし、記憶にもありません。翌十五日に

は学校では今晚はきつと神戸へ来るという噂が専らでした。と云うのはB 29は当時占領されたサイパンからやって来ましたが、敵も準備もあり、そうそう毎日では来襲出来なかつたのでしよう。大抵隔日にやって来るのが慣しとなつていました。しかし心配した十六日早朝(いつも午前二時頃から四時頃迄が大空襲の時間になっていましたが)はB 29は一機も来襲せず、その日は生理と病理の試験がきちんと行われました。しかし、ない事にその日は朝から爆撃もせずB 29一機づつが二度も来て当時としては超高度で飛行雲を引き乍ら飛び去って行きました。今晚は間違いない。皆そう考えました。今夜の空襲のために早く寝とけよ。お互いにそう云いあって分れたのですが明日は武田創先生の解剖学の試験。午後十時が過ぎるとそろそろ心配になって来ました。寢床からそり、そりと這い上り机に向つて今も忘れません、ノートを開いて中枢神経系小脳のところ迄読んだときです。予想通り空襲警報が鳴りわたつたのです。学校が一時的にせよ機能を失つた瞬間、何げなく私の見ていたノートの項目が現在私が情熱をかた付けている研究分野とは何だか密な気がいつも致します。

午前二時過ぎ、聞きなれた腹にこたえるB 29の爆音がしたと思うと異様な地響きと共に近所の高射砲陣地からの激

しい音が始まりました。恐る恐る庭に作つた防空壕から抜けて出てみますと西の空がパッパッと明るくなつています。神戸がやられた。と咄嗟に二階へ上り西の窓を開けてみますと、赤い焰が天を焦し、焰の数が次から次へと数を増しています。そして神戸の街はまたたくうちに一つの大きな火焰になってしまいました。上空には笠を覆せたように大きな白雲が拡がり始め、このため目標がつけにくいのでしようB 29の編隊は次第に低空飛行となり、機体が焰に照らし出されて夜日にもはっきりと見られるようになりました。そして焼夷弾が丁度火花を天空から逆に地上に向けて打出すように神戸の街に突刺さつてゆくのがはっきりと見られました。

B 29は次から次へと繰返し、繰返し爆撃を続けます。中には高射砲弾に当って火をふいたり、一瞬にして空中で四散するのも見られました。ああ、とうとう神戸も灰燼に帰した。あの焰の中で我々の学校も今燃え続けている。明日からは解剖の試験どころか、神戸の中心市街は何一つ残っていないだろう。窓から西の空を眺めぼんやりとそんなことを考えたりなどしているうちに空襲も午前四時過ぎにやつと終りを告げました。

午前六時、電車が動き出すのを待って学校へ馳せ参すべ

く神戸に向いましたが阪急は芦屋まででストップ、やむを得ず阪神電車の通ずるのを待って三宮へ、市内は予想以上に惨憺たるもの。見渡す限りの荒野、あるものは唯焼け爛れたセメント建築物だけ、何ともいえない熱気と匂いが漂っています。火災を避けながら神戸駅近くの国鉄のガードを北側へくぐり抜けると見なれた人家は一軒もなく、すぐその先に学校と病院が立っていました。学校は残っている。感激しました。

道には八角柱の焼夷弾の不発のものがゴロゴロころがっていますし、未だあちこちが燃え続け危険の上もありません。湊川神社東側の道を学校へ急いだのですが路傍には焼夷弾の直撃をうけたのでしよう、防空頭巾を被りモンペをはいた若い婦人が二人空を掴んだままこと切れていました。もっとひどかったのは大倉山交差点でした。市電の三叉路の中央にちょっとした防空壕があったのですが、その中にぎっしり人が詰ったまま、折り重なって蒸し焼きになっています。辺りの焼跡からはもうもうと煙が足もとに立ちこめ、暑くてオーバーなど着られたものではありません。

学校と病院は確かに残っていましたが木造建築は勿論全焼、鉄筋のものも遠目からは焼残っているように見えたも

のも、近づいてみると中は焼け落ちて残っているのは唯外廊だけ、現在の基礎学会の四側の三分の一は各階共中身は灰になっていましたし、病院の方も本館の美しいタイルの外装は剣げ落ち、各種共屋上には焼夷弾が針山のごとく無数に突きささっていました。建物の中には未だ燃え続けているものもあり、早速我々のように駆けつけた学生は各所に分れて消火を始めました。

私は当時の栄養部の建物を懸命になって消火しておられた確か石川教授らだったと思う一団に加わりました。さすがの火災も燃えるものが無くなると自然に火の方から勢いが衰え、ひる過ぎにはほぼ鎮火しました。やれやれと抜き出しの握り飯をほおばっているところへ、配属将校から今から福原の屍体を収容に行くからシャベルを用意しろとの命令です。

この話は結局台々の学校にはお鉢が回らず、帰ってよろしい。ということになりました。行きはよいよい帰りはこわいで日は暮れかかるし、乗物は無いしで見渡す限りの焼け跡を学校から加納町へ向って一直線に歩きました。

兵庫区、生田区もひどいでしたが、其合区もこれに負けず、加納町三丁目の交差点の路傍には名前のわからない黒焦げになった屍体が確認用の白札をつけてここに三体、あ

そこに五体と並べられてありますし、二百町の辺りだったと思います。戦災者の屍体が何重にも重ねられて野焼きにされるのに出くわしました。紫色の煙が夕闇に漂い、附近を煤けた服をまとった男女が着のまま唯目的もなく右往左往するようすはこの世の儼とは思えぬ光景でした。

大空襲のあと

大学が焼かれた大空襲の翌日三月十八日(日)は私が学校の警備宿直ということになっていました。仕方なく荒涼たる焼跡を歩いて学校へ来てみますと、今の基礎学会は近辺の罹災者がどつとつめかけて、どの研究室も講堂も罹災者によって占領されてしまっています。それがまた、秩序も、道徳もあつたものでなく、まさに難民の群と言った感じで、配られてくる炊出しの盛り飯をとり合ひする、罹災証明書のことと口論するといった具合で、夜になつてもその騒がしきといったら頭にくるばかりです。それに我々の当直用の蒲団も何もかもこれらの人達によってすでに失敬されており、とうとう一睡もすることが出来ませんでした。研究室に入り込んだ連中はその辺りにある器具を手

当り次第こわすやら何やらで、数日後基礎学会を戦災者のための急造病室にするべく、立ち去つてもらったときには丁度イナゴの大群が襲つた跡といった感じでした。ピロウな話ですが各階の廊下、階段には尿尿がされたままになつており、はじめの頃はそれでも戦災をうけて気の毒な人達といった感じが、後ではいろんな意味で随分いやな思ひに変わってゆきました。例えば解剖の武田教授の個室まで、これらの人達が侵入し、論文の原稿までどこかへ持ち去つたと聞いています。

附属病院のベットでは足りないので基礎学会も戦災者用の急造病室に変わったのですが、ベットは寄宿生のベットが少々あるだけ、あとは床の上に畳か、ござを敷いて患者を臥かすことになりました。基礎学会の方も各室とも戦災者がぎっしり詰つていたので、如何に三月十七日の空襲が酷かったか想像していただけだと思います。近頃の学生諸君にこんなことを申しても本気になさらないかも知れませんが、刺傷も、周囲の環境も不潔の一語に尽きるため、創口にハエのウジがわきはじめました。それも一人や二人の患者ではないのです。藤田教授が回診の際、注射筒に消毒液を入れて創口にかけられるとウジがポロポロと床に落ちていったのを今でも強い印象として残っています。

我々の同級生も吉田君が弾片を受け、同様に急造病院に入院していました。吉田君の場合は創も小さく、急所もはずれていましたが、それでも可なり永く入院していたように記憶しています。

三月二十一日（水）には硫黄島も玉砕し、B29のみならず、艦載機もほとんどんやって来るようになりました。講義の方は自然休講のような形になってしまいました。学生による学校の宿直だけは不思議にきちんと行われていました。ところがそのときに配られる食糧が握り飯なのですが、これが入したしるもので病院ともあろうところから運ばれて来るのにハエがわんわん群がっています。不潔なこととはよくわかっていても食べるものとてないため、これを喰っていたわけです。それが原因で何人かが相次いで赤痢などの消化器系伝染病に罹ったりしました。一番変わった症例は、同じ日に運ばれた握り飯を食った福崎君が重症の赤痢にかかり、同じく土屋和道君がパラチフスにかかったなどという、とんでもない事件がありました。現在なら新聞にアカデカ、保健所は総動員といったところでしょうがそこは戦時中もその末期、随分ルーズなことだったと思います。福崎君は灘の自宅で養ったのですが、入院するところもないため、わざわざ中庭教授（現・兵庫県がんせ

ンター専務理事。元第一内科教授）が往診され、毎日附属病院の看護婦さんが二人交替でリンゲル等の輸液をされたと聞きました。この間も福崎君が、当時あんな献身的な治療がなかったらどうなっていたか、わからなかった。としみじみ語っていましたから、当時彼のみならず学生を如何に学校当局が可愛がっていたかわかりになると思います。

虚 脱

三月十七日の大空襲で自然休講の形だった講義も四月二日（月）八時半よりの学生による学舎内外の清掃により気分をとり直して再び始められました。神戸へはあいも変わらず毎日の様に敵機が来襲して来ましたが、それでも想像されるよりはわりときちんと講義はなされ、敵襲のあいまをぬって学業は進められ、四月十二日（木）より薬理学も新たに始まりました。

四月二十日（金）は開校一周年記念日、学生は午前八時登校。小川校長より訓話ののち、当時甲南高校（旧制）校長だった大野貞祐博士より、医家と教養と題する講演を十一時すぎ迄聴きました。ここ迄なら現在の開校記念日と大同小異なのですがそれからあとが変わっていました。配

属将校より学生一同校庭に整列を命ぜられ、各自胸に名票をはっきりつけているかどうかという服装検査—いわば気合い入れ—が始まりました。私は胸に名札なんかつけることは絶体嫌だったものですから、たるんどるということで懲罰に学帽を配属将校助手の中尉に取り上げられてしまいました。

四月二十三日(月)にはソ連軍ベルリン市内に突入、五月二日(水)の新聞にはヒットラーの死が報ぜられ、大本營がいかにうまく報道しても、もう駄目だということは誰もが感ずるようになりました。私達学生もいつ戦線にかり出されるかも知れない。そしていつ死ぬかも知れない。しんそこからそう感ずるようになりました。しかし五月十日には附属病院の職員对学生のテニスの対抗試合を焼跡のコートでやっています。今から思うとどう考えても実に奇妙な感がありませぬが、案外今考えるよりも一方ではやけ半分でのんびりしたところがあつたのかも知れないなどと考えたりしています。

テニスをやっているかと思つた次の日には講義のあい間に学校近所の焼跡整理にかり出されました。平野辺りへは随分行かされたと記憶しています。又空襲による類焼を防ぐため家屋疎開という名のもとに何ともない空家を壊すの

を手伝ったりしました。壊した家の材木は壊したものが勝手にどんどん運び去つたのですから今から考えると全くのちやくちやくをやっていたわけで、学生が壊した分は荷車に積んで学校へ持ち帰り防空壕を作る材料にしていたと思えます。

五月二十二日(火)の新聞に学徒隊結成と発表され、本七上陸の際は学校がそのまま軍隊になる仕組みになるとのことでしたが当時すでに軍には私達にわたす統もなく、あるものはせいぜい。ごんば剣。位なものでした。

五月三十一日(木)より我々の講堂は新人生のため今の基礎学舎三階細国学実習室のある部屋へ移りました。床はセメントのまま、窓ガラスは破れたまま部屋のなかに裸のセメント柱が何本も立っている全く陰気そのものの教室でした。

六月一日(金)医師不足のため歯科医師を再教育して医師免許証を与えることになり、我々の学校もその講習会場の一つになり、この日から講習が始まった様子でした。

同じ日の昼過ぎB29四〇機により五月十一日(被爆地東神戸より西宮迄)以来の大火空襲があり西大阪、尼崎が特に大被害をうけました。

六月四日(月)より生理学の実習が始まりましたが、翌

五日（火）再びB29三五〇機により神戸市の東半分と芦屋がこつぽどくやられました。この頃になると敵は昼間堂々とやって来て、焼夷弾攻撃よりむしろ一トン爆弾の方が多くなって来ました。そのため死傷者が日立って多くなり、又ちやいな防空壕では何の役にもたたなくなりました。この日の空襲で基礎学舎四階の講堂はモロトフのパン籠と称する大型焼夷弾が大井を貫きましたが四階の床で止ったところを学生一団でからも消し止めました。今でも基礎学舎の屋上に上ってみたらその爪跡が残っていると思います。附属病院は再び負傷者のため大混雑を呈しました。廊下はまだ溢れる超満床の被爆者の膿と体臭のため、病院へ入ると一種どくとくの悪臭が鼻をつく様になったのもその頃でした。そして神戸市の家屋はこれらの空襲で約半数（四四％）となってしまったのです。

その頃の日記をくってみますと私は比較的まじめな方でしたが、それでも平均一日おき位しか講義を受けておりません。サボっているのではなく、電車が止ったり、空襲があったり、警報が出たりしてこちらが行けなかったり、折角学校へたどり着いても先生が同じ理由で来られずに休講になつたりしていたのです。

八月一日（水）にはさきき新聞に載った学生義勇隊の結

成式が行なわれました。しかし夏休みは五日からと決定、やれやれということと遠方から来ている学生は嬉々として帰り支度を始めました。地方の農村から来ている人達は皆郷里からは食糧もないし、いつ何時弾にあたって死ぬかも知れない都会にいるより早く帰れ帰れとせき立てられていたようですが、焼け出されて、下宿を転々と替えながらも皆随分頑張っていた様子でした。個人を例にあげて恐縮に存じますが、ノッポの森雅利君がお母さんの作ってくれたという、防空頭巾をいつも背中にしょって汽車の汽笛が聞えて来るたびに四圍の郷里に帰りたい、帰りたいといながら雑炊腹で頑張っていた姿が昨日のことのように思えてなりません。

八月十四日（火）、ラジオが明日正午重大発表があるからと繰返し放送し、夕方には学校から明日正午校庭に集合すべしとの連絡が伝わって来ました。私は丁度風邪気味で寝ていたのですが、明日の正午何が起るかをうすうす感じながら、明日は学校へ行こうか、行くまいかと小川校長と配属将校の顔を交互に頭に描きながら寝床の中で明日以後の自分の行動を如何にするべきかを考えたのでした。

再建・大学へ昇格か

戦争は終り、学生は皆放心状態でしたが学校の方は八月二十五日(土)より学期試験が始まりました。二年生は二十五日が細菌と病理、二十七日(月)内科診断学、二十九日(水)薬理、三十一日(金)外科総論と云った具合でした。

しかし二十八日頃から各地に連合軍が上陸を始めましたし、本当のところどうも試験を受けられるような状態ではなかったようです。十日程休暇があった後九月十日(月)より二学期が始まりました。九月十一日だったと思ふのが朝登校してみますと掲示板に、学生に自由を認めよ。と云う主旨の徹文が貼られています。学校当局も今迄一度もそう云った事件がなかったため驚いたり、迷ったりした様子でしたが、学生の方も始めは誰が書いたのかさっぱり見当がつかなかったのです。そのうち坂上明君が自分が書いたのだと名のり出たため、彼がその後学生代表として当時学生部長をやっておられた真川伊佐雄氏とはげしく交渉をはじめることになりました。

十五日には坂上君が議長になり本学最初の学生大会が開

かれました。しかし当日の議題は思想問題などと云うものでなく、我々学生をもっと大人としてあつかえ。と云ったようなまことに素朴な要求でした。例えば煙草は自由に喫ってよろしいとか、髪を長くしてもよろしいとか云うような現在の学生諸君が驚くような議題ばかりだったので。

世相は九月十八日に大きな台風が日本各地を襲い、米作は大被害、大飢饉問題いなしと云った暗い話ばかりだったので。九月二十四日には学校当局より明日から神戸地区に米軍が進駐して来るから明日と明後日は休講と云うおふれが出ました。三宮から元町に至る国鉄ガード下にブラックマーケットが出来たのもその頃でした。店舗があるわけではなく、うす雑い三國人が、甘いマンジュウ一こ五円やすいよ、やすいよ。などと云って誰を片手に立売をはじめたのです。メリケン粉のマンジュウ一こ五円は当時、私が中古とは云えま新しい自転車を買ったら六十円でしたから随分高かったことがよくおわかりになると思います。それでもその非衛生的な闇マンジュウが餓鬼の様な人々には飛ぶように売れたのでした。当時は学校の帰りに通りがかりに散髪屋へとび込んだら石鹸をもって来なかったからと云ってひげを剃ってくれなかったと日記に書いています。ずいぶん今から考えるとむちゃくちゃな世の中だったわけで、学

校の行き帰りにその開マンジューウを売っている三宮ガード下でルンペンが死体になっているのをその年の秋から冬にかけてしばしば見かけたものでした。

十月三日（水）には法医学の講義が始まりました。ところが十月半ばを過ぎた頃から戦時中に出来た医専は廃校になるかも知れぬとの噂が噂をよび始めました。そして母校を大学にせねばとの声が各方面からぼつぼつと出かけて来ました。

学校の存否が云々されている間にも十一月十五日（木）には軍関係の学校よりの転入学生二十九名が一年生に編入され、その入学式が行なわれました。学校の講義はどうやら順調に進んでいましたが、年末になると石炭事情が極度に悪くなり、列車は五割減となってしまいました。正月になっても帰郷出来なくなる。そこで十二月三日（月）に学生大会が再度開かれ学期試験の延期と休暇は十二月十日からとの要請が出されたわけです。学生の要求は不思議なことと全面的に入れられ、十二月六日（木）には教務より、十日より一日早く九日より休暇にするとの発表がなされました。

年が改まって昭和二十一年一月中旬、父が当時兵庫県医師会の副会長をしていた関係でしょうか、神戸もどうやら

大学に昇格するらしい。そして小川校長は勇退されるかも知れぬとの話を私に伝えてくれました。そして一月三十日（日）の新聞紙上にも兵庫医専が大学に昇格、予科は藤山の旧兵舎を利用との記事が載ったのです。

母校大学に昇格、われわれ

は予科へ

母校が大学になるらしいことは新聞紙上にも報ぜられましたが、我々学生はどうなるのかということが問題になって来ました。私達同級生のうちにも、大学へ進みたい人と、このまま医専にとどまって早く卒業したい人とがあり、このまま医専にとどまると如何にして大学予科に入るかということが話題の中心となって来ました。阪大（医学部）が大学に昇格したときはどうだったの、京都府立医大が医専から医大になったときは在學生はこうだったのと過去の歴史をひもどいたりしました。そして何れにせよ、過去の例から見ても予科の適当な学年へ横すべり出来る可能性があるとの淡い希望的な結論に達しました。

一月二十三日、これまでただ噂話に終始していた我々の予科編入の希望を一つの運動として大学昇格運動と共に皆で大いに各方面に働きかけようじゃないかということに発

展しました。そんなことに気をとられているうちに亦々学校の方は試験が始まり、二月四日（月）内科と法医、五日（火）薬理と衛生、六日（水）外科と病理、七日（木）耳鼻科、そして二月十二日（火）よりは三学期といった具合でしたが熱の入るわけがありません。

二月十五日（金）の神戸新聞に次のような記事が載りました。

四月開校日として県立医専の大学昇格準備へ

——県立医学専門学校医科大学への昇格問題につき兵



正路倫之助先生

県では文部省との折衝の結果内容次第で認可してもよいとの内意を得たので、近く創設費二百万円を臨時県会または参事会に提案、四月一日開校を目指して準備を急ぐことになった。医大創設に当っては附属病院の拡充、研究室の整備教授組織の充実に当り、大学は現在の医専校舎、予科三年、大学四年で現在の医専生徒はそのまま医大へ編入させる。なお創設費三百万円のうち五十万円は医専創設に際しての寄附金の残りを充て二百五十万円は一般の寄附を仰ぐ——云々。

そして二月十六日（土）の朝日新聞には文部省内諾の記事が載りました。今こそ大学予科編入希望をはっきり意志表示すべし。大学進学希望者はどう考えました。そして二月十八日（月）、伊藤（信）、中川、山田（裕）、分玉、西口、四府の諸君、それに私などが発起人になってクラスメートに運動の主旨を伝えました。翌二月十九日（火）にはこの問題については個人的に意見を討わしていただくのがいつの間にか学生大会となってしまい、意見百出、結論が出ぬまま流会の形になってしまいました。しかし運動の主旨が皆によく伝わったとみえて、クラスのうちで予科へ進みたいものだけが翌日のひる休みに進云うとなく集

り、代表のものが学内の実力者に会って我々の希望をよく伝えようという段取りになりました。二月二十日（水）小川環五郎先生、二月二十一日（木）竹田正次教授、二月二十三日（土）真川学生課長、私が受持って会った先生方の名が古いメモに書かれてあります。

二月二十五日（月）、十時より講堂で新旧校長の挨拶がありました。鶴のような小川環五郎前校長とファイトのかたまりのような正路倫之助新校長は実にいい照対でした。我はひそかに新校長の口から大学昇格、そして予科編入の話が出ることを期待していましたが、とうとう最後まで先



正路先生の余技

生の口からは一語もその話はずしませんでした。

二月二十七日（水）は教授会、おそらく大学昇格問題が出たであろうとの予想で午後三時半、会議が終ると共に私達は正路新校長を探し、そしてその話を聴こうとしましたが、何処へ行かれたのか、さっぱり行き先がわかりません。丁度運よく武田創教授と会い、一回昇格問題の集点を聞こうとしました。先生は会議の内容はうまくそらされませんが、今迄私達が会ったどの先生よりも——先生によっては随分私達に冷たかった方もおられたのですが——非常によく話を聞き、理解してくださいました。それに力をえて誰云うとなく校長に学校で会えないなら自宅へ押しかけようじゃないかということになり、出かけるところで、ちょっとした目的の正路先生に会うことが出来ました。まあ、私の部屋にとのことで校長室へ、感激しました。はじめは険しい顔をして私達の説明を聞いておられた先生が、実に私達の云い分をよくわかって下さいます。昇格実現を約束すると共に、それちや若達は予科二年に編入と云うことで文部省に当たってみましょう。ですから、廊下へ出てから互に肩をたたき合いました。

早く正路先生、文部省へ行ってくれないかね、この間の話ではすぐ上京して話をするとの事だったが、三月も九日

(土)の日になっても学校におられる正路先生をみると心配になって来ました。

三月十八日(月)、午前九時すこし前、足ばやに正路先生が突然講堂へ入って来られ、例のせわしそうな口調で学校の申請が入れられたことを告げられ、佐田愛彦先生が近いうちに文部省側として視察に来られるとのことをつけ加えられました。

三月二十二日(金)、佐田愛彦先生来学、四月一日(月)には校長より大学昇格問題と新に行われることになった国家試験について十分ばかりの訓話がありました。

このところ嬉しいことばかりでしたが、ここで悲しいことが起りました。四月二日、病床にあった同級生の品川普君が亡くなったのです。そして同じく大学予科へ編入を希望していた分玉義隆君も肺結核のため、日を前後して亡くなったとの報をうけたのでした。

四月八日には校長より正式の大学昇格に関する説明会。もう安心です。四月十五日(月)よりは学年試験が始まりましたが心ここにあらず、どんな成績だったか、おして知るべしだっと思えます。四月十八日(木)大学昇格正式決定、正路先生も嬉しかったのだと思えます。二十九日の天皇節(戦後未だありません)の式の後、お尋ねの邦楽の

レコードコンサートなるものを先生の解説で催され、我々はデンプンカンパンながら聴き賞にアンパン二個をもらって聴かされたものでした。正路先生は後にも一度講堂で二味線を弾いて学生に聞かして下さったことがありました。

五月三日(金)、新聞紙上に予科二・三年募集要項が載り、七日、私達クラスメート一四一名中六十四名のものが予科編入の願書を呈出しました。

五月十六日(木)は午後一時から体格検査。翌日は午前九時より十二時まで編入試験(筆答)。

五月二十七日(月)には合格者の発表があり、私達六十四名は全員合格、他校よりの受験生をあわせて予科三年編入合格者は七十三名となりました。五月三十一日(金)には予科一年生の合格者発表。

六月十日(月)午後一時より四階大講堂にて兵庫県立医科大学予科一、二、三年学生の入学式。予科長には元京城帝国大学教授動物学の森為三先生(亡)が就任され、われわれ予科生徒は六月二十日より篠山連隊の旧兵舎を改造した学舎で学ぶことになり、思い山深い丹波篠山での予科生活が始まったのでした。

(おわり)